

そう祖母との文通

浅口市立金光小学校

五年生 西山 心和

私は九十才差のそう祖母と文通をしていた。手紙のやりとりに加え、毎月末に、カレンダーを作って送っていた。上半分が絵、下半分がカレンダーだ。絵は、次の月の行事や季節の花、私の思いなどを、色えん筆やペン、絵の具、折り紙、時にははり絵や立体型にして、そう祖母が楽しめるようにした。そう祖母の部屋のカレンダーは、ねていてもすわっていても見える場所にかざられていることを知っていたので、私も作るのが楽しかった。京都に住んでいたそう祖母とは年に三回以上会っていたので、思い出はたくさんある。私の一番古い記おくは、五才の十二月に、そう祖母へのたん生日プレゼントとして、「一月のカレンダーを作る」と、私が言ったことだ。

元気だったそう祖母がし設に入ったのは、三年前の夏だ。しかも、コロナウイルスのせいで会えなくなった。このとき、私

は会えないことが、これほど心配で悲しいことだということを知って知った。メールや電話、オンライン面会など、そう祖母がさみしい思いをしないように、できる限りのことをした。そして、私にできること。また、私にしかできないこと。それがカレンダーを作り続けることだった。月末に必ず手紙とカレンダーがどくとという「安心」をそう祖母にとどけたかった。手紙に写真をそえて、最近の私の様子やうれしかったことをできるだけわしく伝えた。手紙を送ると、一週間後にはそう祖母から返事が来る。それが何より私の楽しみだった。

しかし、そう祖母からの手紙が、昨年の夏ごろから時々おくれるようになった。便せんいっぱい書いてあった文字が、少なくなったり、ななめになったりしていた。私の心配はじわじわと増した。

そして、待っても待っても手紙の返事が来なくなったのは、今年の三月だ。年賀状のお礼などが、少しふるえた文字で書いてあった二月が最後の手紙になった。もし、文通相手がそう祖母でなかったら、その時にカレンダー作りをやめていたかもしれない。でも、私はやめなかった。やめたくなかった。そう祖母は、家族にさえ会えなくて心細く思っているはずだ。だから私は、カレンダーも手紙も送り続けた。そう祖母も、きっと私に返事を出したいと思っているにちがいない。

そんな気持ちが強まる中、五月の連休中に、私はある本と出

会った。『字のないハガキ』だ。私は、「これだー!」と思った。この本を読み、返事がかん単に書けるようにしようと考えた。手紙に「ひいばあちゃんのお気持ちを『ありがとう』は①、『うれしい』は②、『よかったね』は③、『がんばって』は④と数字で書いてほしい」と書き、ふうとうの中に、私の住所と名前を書いた葉書を入れて送った。きつと返ってくる。そう信じて待った。

しかし、一か月経っても返事は来なかった。七月のカレンダーを送るとき、切なかった。心が苦しかった。私たちは、八月になってすぐ、そう祖母に会いに行った。ガラスごしで数分だけの面会。周りにはかい護士さんやかん護師さんもいる。それでも、そう祖母は車椅子にすわって、笑顔で手をふってくれたし、別れ際には両手を合わせて「ありがとう」と言っているように見えた。その日からちょうど一週間後、そう祖母は亡くなった。

のうかんの日、四年八か月作り続けた五十六枚のカレンダーをひつぎの中に入れた。たくさんの思い出がそう祖母を囲った。祖母や親せきの人が、

「よう、毎月作ったなあ。」
とか、

「これでひいばあちゃんもさみしくないわ。」
などと声をかけてくれた。悲しいだけののうかんも、カレン

ダーで話題が広がり、集まった人が少し笑顔になってくれた。ひつぎの中にカレンダーを入れたのは、そう祖母が毎月、大切に残しておいてくれたおかげだ。

私の文通も終わったなあと思っていたある日、私が学校から帰ると、ゆう便受けに一枚の葉書がとどいていた。近くに住んでいる祖母からだ。最近の出来事が葉書いっぱい書いてあり、月に三回とどくこともある。文はいつもの方言ではなく、とても丁寧な言葉だ。そして、毎回必ず「ありがとうございませう」と書いてある、この言葉は、そう祖母が、手紙でも会話でもいつも使っていた。そう祖母が亡くなくても、そう祖母が使っていた言葉や気持ちがなくなるわけではない。私は、祖母との文通を通して、そう祖母の生き方を祖母が受けつぎ、それを私に伝えてくれていたように、しみじみ思っている。

このことに気づいたのは、そう祖母が亡くなったからだ。人が亡くなったらその人の全部が無くなると思っていたが、そうではなかった。もし、そう祖母が今も元気だったら、私は、まだこのことに気づいていないだろう。そう祖母が生きた百年は、私が生きた十年の十倍だ。その年月の中で、そう祖母が最後まで大切にしていたお礼の気持ち。私はその思いを受けつぎ、これからの毎日を過ごしたい。